

特別寄稿

八幡町応援隊—各々の専門性を活かした教職員による 地域振興支援の試み

平野 幹雄^{※1}・齊藤 隆之^{※1}・宮近 重徳^{※2}・増田 学身^{※3}
八十川 淳^{※4}・佐藤 直由^{※1}

はじめに

仙台市青葉区国見に東北文化学園大学が1999年に開設されて以来、約20年が経過した。国見から市街地に徒歩で下りていった先には大崎八幡宮と八幡町商店街がある。大崎八幡宮は国宝であり、1607年に伊達政宗によって建立された仙台を代表する神社の一つで、毎年1月14日におこなわれる‘どんと祭’が有名である。八幡町商店街は、大崎八幡宮周辺の旧国道48号線沿い、及びその周辺に展開されている商店街である。

さて、全国的に商店街は店主の高齢化等の問題で業況が厳しくなっている。大崎八幡宮のお膝元に位置する八幡町商店街においても、そうした傾向は顕著であり、商店街振興のための新しい取り組みが求められてきた。

今回は、そのような折りに筆者らが八幡町においておこなってきた教職員による地域振興支援の試みについて、八幡町ファン・コミュニティの一員としてのこれまでの活動経過を中心に報告することとしたい。

八幡町ファン・ミーティングの活動に加わるきっかけ

筆者らは、仙台市青葉区にある八幡町商

店会が昨年度より実施している八幡町ファン・コミュニティの活動開始時よりメンバーとして加わってきた（八幡町・ファン・コミュニティの主な活動はFacebookを通じて発信されている。<https://ja-jp.facebook.com/hachimannmachi.syoutenngai.fun.community/>）。商店街の振興と地域の街おこしのお手伝いをするを目的として、これまで月に一度のミーティングに参加してきた。

さて、八幡町ファン・コミュニティにメンバーとして加わる契機となったのは、筆者らの一人が20年以上客として通ってきた理容室の店主が昨年度より商店会の役員になることになり、その前後に、商店街の振興について大学・専門学校の教職員の専門性を活かして協力してもらえないか筆者らの一人に個人的に相談があったことであった。八幡町商店会は、1980年代には会員数が最大80名だったが、2016年には27名にまで減少していた。そこで、地元の方や地域外の方でも八幡町や街作りに興味のある人なら誰でも入れる組織として2016年に八幡町ファン・コミュニティを結成するに至った。この時点では、筆者らにどのような専門性が求められているのかは漠然としていたように思われた。そこで、共著者の一人で地域社会学を専門とする佐藤に相談したところ、主体はあくまで八幡町ファン・

※1 東北文化学園大学医療福祉学部保健福祉学科

※2 東北文化学園大学企画調整課

※3 東北文化学園専門学校建築デザイン学科

※4 東北文化学園大学科学技術学部建築環境学科

コミュニティとし、我々も参加しながら必要に応じて専門の教職員を紹介するようにアドバイスを受けた。筆者らの大学は三学部、さらには専門学校が併設されており、各々の専門性を活かし大学、専門学校の垣根を越え、かつ商店会を主体としたいいわゆるオーダーメイド型のお手伝いをするようになった(ここまで述べた経過については、2017年9月に仙台市民活動センターによって発行された「ぱれっと」217号においても特集された。<http://sapo-sen.jp/wp/wp-content/uploads/2017/09/131ccad154e219ae73b50fa2d6373665.pdf>)。

「八幡まちあるき」マップへの作成協力

八幡町ファン・コミュニティの活動に創設時よりメンバーとして加わり、月に一度のミーティングに参加してきた。会を重ねる中で、大崎八幡宮に訪れる多くの観光客、学生、地元で長く居住している皆さんに八幡町をもっと知ってほしい、そのために八幡町をどのようにアピールすれば良いか議論をおこなってきた。その結果、上述のFacebookの活用に加えて、具体的なアピールの第一弾として街歩きマップ「八幡町まちあるき」の作成をすることになり、協力することになった。先述した大崎八幡宮に加えて、四谷用水なども取り上げることとなった。2015年にNHKのプラタモリという番組で仙台編が放送された際に八幡町を流れる四谷用水(現在はほとんどが暗渠になっている)が取り上げられたこと、その後番組で取り上げられた場所を街歩きする方が散見されるようになったことが、「八幡町まちあるき」作成に至った理由としてあげられた。

「八幡町まちあるき」作成に当たっては、マップのデザインを共著者の一人である増田が、また散策コースの監修を同じく共著者の一人である八十川が担当した。また、残りのメンバーで写真の撮影や印刷業者との交渉、マップの校閲作業への協力をおこなった。なお、それまで筆者らはあくまで有志として協力してきたが、誌面に協力機関として名を連ねることになり、これ以降「東北文化学園八幡町応援隊」を名乗ることとなった。

仙台・地元商店会有志が作製

仙台市青葉区の八幡町商店会が、加盟店と地域の魅力を伝える地図「八幡まちあるき」を作った。物販店、飲食店、不動産業、開業歴など歴史遺産をカラー写真で紹介。テーマ別お薦め散策コースも盛り込んだ。スタッフは「買い物や街歩きに活用してほしい」と話している。

マップはA3判で折り畳み「ラタモリ」にも取り上げられる。商店会に加盟する32店の営業時間や特色をまとめた。大崎八幡宮や龍王寺、三層沢大聖不動尊などを載せた。

散策コースは、「四ツ谷用水・地形巡り」「神社仏閣・歴史の建物」「広瀬川・川景散策」を提案。深谷「へくり沢」や、本年度の土木学会選定土木遺産に認定された四ツ谷用水などを巡る「Nパース組」さん(以下)は、地図作りを通して

仙台市青葉区の八幡町商店会が、加盟店と地域の魅力を伝える地図「八幡まちあるき」を作った。物販店、飲食店、不動産業、開業歴など歴史遺産をカラー写真で紹介。テーマ別お薦め散策コースも盛り込んだ。スタッフは「買い物や街歩きに活用してほしい」と話している。

マップはA3判で折り畳み「ラタモリ」にも取り上げられる。商店会に加盟する32店の営業時間や特色をまとめた。大崎八幡宮や龍王寺、三層沢大聖不動尊などを載せた。

散策コースは、「四ツ谷用水・地形巡り」「神社仏閣・歴史の建物」「広瀬川・川景散策」を提案。深谷「へくり沢」や、本年度の土木学会選定土木遺産に認定された四ツ谷用水などを巡る「Nパース組」さん(以下)は、地図作りを通して

四ツ谷用水、へくり沢…高い注目度 歴史や自然 3コース提案



完成した地図の出来栄を確認する作製メンバー

じつと歴史や自然に恵まれた地元の良さを再発見できる。ファンへの裾野を広げた。1万部刷り、掲載店や大崎八幡宮などで配っている。連絡先: 011-822-0000(2017.4.14)

資料1. 「八幡町まちあるき」完成に関する新聞記事(2016年12月24日河北新報夕刊より)



資料2. 「八幡町まちあるき」の表紙および裏表紙

仙台 八幡町、宮町などネットワーク

仙台市内の商店街が、共通の課題や独自の振興策を語り合うネットワークをつくった。今月上旬、初の情報交換会が青葉区八幡の飲食店であり、意欲的な事業に取り組み商店街が事例や要望を報告した。今後も市内各地で開導予定、厳しい環境にある商店街同士が知恵を出し合い、互いの発展に役立てる狙いがある。

互いの知恵 解決の糸口に

八幡町商店会（青葉区）の加盟店などが6月に結成した「八幡町商店街ファン・コミュニティ」がネットワークと呼び掛けた。フェイスブックを活用した商店街の魅力発信などに力を注ぐ中、市内の実践例に学ぶと企画。宮町（青葉区）、中山（同）、長町（太白区）などの商店街関係者が参加した。

商店街の課題 情報交換

情報交換会では、宮町が山形県西川町との交流や住民グループによるフリーペーパー「388（おみや）プレス」の発行を紹介。中山は子育てやシニアライフの支援、空き家対策などの地域プロジェクト、長町は専門知識を持つ店主らが講師になって聞く「長町ま

ちかど教室」を解説した。宮町商店街振興組合の佐藤行理理事長55は「個々の店が失敗したり、ピンチを乗り越えたりした体験を伝え合つて得られるものは大きい」と話す。



商店街の将来像を模った情報交換会

資料3. 商店街サミットに関する新聞記事
(2016年12月29日河北新報夕刊より)

2016年12月に「八幡町まちあるき」の完成を迎えた。情報を絞り込みつつ、歴史遺産、地域の商店・医院の情報、おすすめ散策コースを掲載したものとなった（資料1および資料2）。八幡町ファン・コミュニティが主催して、お披露目会を兼ねた商店街サミットをおこなった。仙台市内の複数の商店街と一緒にパネルディスカッションをおこない、商店街振興のための独自の取り組みについて話題提供があり、指定討論者として共著者の一人である佐藤も登壇して議論の輪に加わった（資料3）。

「八幡まちあるき」の活用への協力

「八幡町まちあるき」は1万部が作成され、商店街だけでなく大崎八幡宮やJR仙山線の国見駅などでも配布された。続いて、八幡町ファン・コミュニティでは「八幡町まちあるき」を活用した企画を考えることになった。

そのうちの一つは、前述のブラタモリの番組の中で四谷用水のガイド役を務めた東京スリパチ学会会長の皆川典久氏を招いての講演会、及び街歩きの企画であった。本学の地域連携センターと教育支援センターに共催していただくこととし、後者のフロアを会場に講演会を行うこととなった。60分の講演会の後は、希望者を引き連れて街歩きを実際におこなった。配布された「八幡まちあるき」を活用しながら、皆川氏より暗渠や用水路の遺構の解説を受けると同時に、商店街のいくつかの店舗に寄り道をしたり、終了後の懇親会を行ったりした。

また、八幡町地域に存在する中学校における地域フィールドワークの授業において「八幡町まちあるき」が活用され、まとめの発表会には八幡町応援隊のメンバーも参観をおこなうなど、「八幡町まちあるき」を通じて八幡町応援隊と八幡町との交流が広がっていった。

まとめ

本稿では、筆者らが八幡町ファン・コミュニティの活動に加わるに至った経緯、「八幡まちあるき」の作成への協力、「八幡まちあるき」の活用への協力について記した。大学の地元の商店街の皆さんが街おこしのために主体的に協働し、彼らのニーズに基づいて、必要な専門性を持った学内の人材に支援をお願いし、一つ一つマッチングしていくいわゆるオーダーメイド型の支援協力を特色とした。支援を始めてみると、個々の教職員がもともと何らかの形で八幡町や商店街の皆さんと関係性があり、そうした個人的なつながりを起点に大きなつながりへと紡がれていくなかで支援協力が展開されたと捉えることができるだろう。東日本大震災の被災地において支援を受けたい側のニーズと支援をおこなう側の専門性とが必ずしも合致していなかったという声が聞かれているが、そうしたことの合致が改めて大事であることと、そうした支援はお互いの関係性の中で継続的に展開されていくべきことだと再認識させられた。それらの関係性が常に地域の中で、あるいは地域と社会資源である大学・専門学校との間に築かれていることが、自然災害に限らず実際に支援協力が展

八幡町応援隊

開されるときに円滑さに結びつくものと考えられた。

上述したように、教職員個々人と八幡町や商店街との関係性を起点に出発した八幡町応援隊ではあるが、そうした関係性は維持しつつも、今後は大学・専門学校と八幡町との組織的な連携を模索し、協定を結ぶなどして大学・専門学校が地域の中で何が貢献できるか考える時期に差し掛かっているように思われる。同時に、学生の教育を地元地域の中で展開することで、本当の意味で地域に根ざした大学・専門学校として時を刻んでいくことが求められているものと考えられた。